

第66回 全国造形教育研究大会 東京大会

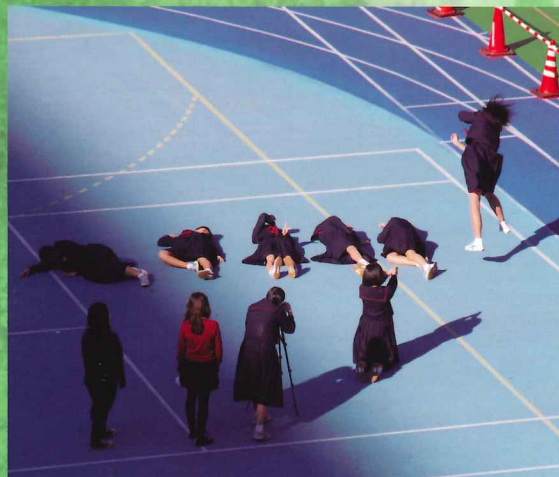
第52回 東京都図画工作研究大会 城東大会

第31回 東京都中学校美術 教育研究大会

66
R
Z
Z
2013 東京

造形美術教育のダイナミズム — 成長と連携 —

報告書



期日：2013年(平成25年)11月28日(木)，29日(金)

- 第1日目:全体会 11月28日(木)
会場:国立オリンピック記念青少年総合センター
- 第2日目:校種別分科会 11月29日(金)
会場:文京区立千駄木幼稚園・江東区立南砂小学校・墨田区立両国中学校

公開授業No. 28

日本の美 —金色の光と空間デザイン

▶ 中学校 2年生

[授業者]

三井記念美術館 亀井 愛
東京都美術館 熊谷香寿美

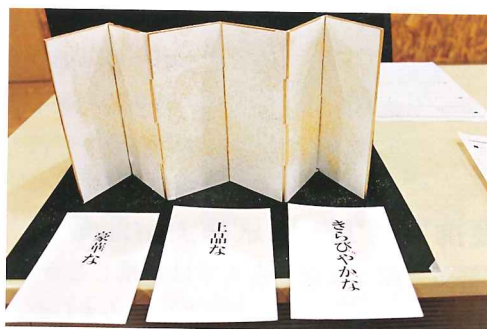
① 授業をふりかえって

今回の授業では、「金」と身近な「光」に着目し、実際に金箔を使った砂子蒔き体験の後、尾形光琳筆《群鶴図屏風》（高精細複製画）を鑑賞する2時限を展開。活動は次の3ステップで行った。
①金の素材を鑑賞②金の素材を蒔く体験③金色の光と空間を意識し本物の屏風を鑑賞。また、生徒にとって非日常である日本美術の世界を視覚的体験的に伝えるため、職人が金箔をつくる様子を動画で紹介、屏風の構造がわかるミニ屏風を使用、蠟燭のように揺らぐ光のLEDランプで3種類の金色や屏風を鑑賞、畳を敷きその上に座って屏風を鑑賞した。さらに、鑑賞では「光を表す言葉」をカード化し活用する等の言語活動を取り入れた。こうした展開により、生徒の屏風鑑賞は素材体験とつながった、「金」や「光」の視点が入る深いものとなった。それは次のような生徒の言葉からも伺える。

- ・金箔の貼り方によってその場の空気の流れを感じる。(鑑賞時の言葉)
- ・金と言えばキラキラでまぶしいイメージだけでしたが、光の当て方や種類でとても優しいイメージにできるんだと思いました。*



「光を表す言葉」を金箔（砂子）で表現



上：光を表す言葉カードと完成したミニ屏風
下：畳に座って鑑賞

- ・本物の屏風をみた時に四角い線が見えた。前回教えてくれたことが確かめられたからよかった。自分が想像していた金の色と違ったからびっくりした。*（※2回の授業を通じた感想）

② 成果と課題

成果としては、本大会趣旨である「連携」が館種の異なる2つの美術館と学校で具体的に実現できた点である。また、生徒の様々な言葉を残せたことも成果と言える。課題は担当教員と指導目標を共有したプログラム策定ができなかった点である。さらに深い連携の実現のためには、学校と美術館の両者による協働が必要であると考えらる。

シンポジウム

キーワード

連携でつくり出す美術の授業

[モデレーター]	三澤 一実	武蔵野美術大学
[パネリスト (音順)]	伊藤 達矢	東京藝術大学
	亀井 愛	三井記念美術館
	熊谷香寿美	東京都美術館
	原瀬 裕孝	ルーヴル-DNP ミュージアムラボ
	平谷美華子	東京富士美術館
	米徳 信一	武蔵野美術大学

◆公開授業の振り返り◆

美術館・企業・大学、それぞれが中学校と連携してつくりあげた公開授業について、各授業者より内容の振り返りの発表をしました。参加者はここで、各機関が連携して行った3つ全ての公開授業の概要を聴講し、共有することができました。



◆連携事例1・東京都美術館◆

東京都美術館と東京藝術大学は連携しながら、子どもたちのミュージアム・デビューを応援する「Museum Start あいうえの」を今年度より始めました。先生と子どもたちがそれぞれ、公的な学習施設である美術館の使い方を知り、学びの多い実りある体験ができるプログラムを、アートコミュニケータ（とびラー）という市民と共にしています。休館日の展示室で行う「スペシャル・マンデー」は事前準備から先生と相談し、当日の体験が充実したものになるよう連携しています。

◆連携事例2・東京富士美術館◆

都心から離れた多摩地域の私立の美術館という観点で事例発表をしました。主には2008年に増築し、ルネサンスから現代までの常設展示室が完成してより、学校利用を増やす取り組みを発表しました。具体的にはアートカード、対話型鑑賞、五感で観る手作りワークシート、市内小中学校を中心とした鑑賞バスの運行、大学との連携授業等を紹介しました。



◆グループディスカッション◆



午前中の連携を含んだ3つの公開授業とその振り返り、そして2つの連携事例の発表を受け、午後は5～6人の小グループで「連携の意義」「教科としての美術の意義」等についてディスカッションをしました。各グループにはパネリストがファシリテータ（進行役）として入り、畳上でミニ車座になり、自由な雰囲気の中、率直に意見交換をしました。各グループ共に、核心に迫る有意義な時間を共有できたようです。

◆モデレーターとパネリストより感想◆

三澤 一実 (モデレーター)



美術館と学校の連携を模索する上で、物理的障害は話題にするつもりはなかった。そもそもその障害を乗り越えないと連携は生み出せないと感じていたからだ。予想どおり参加者から、「近隣に美術館が無い、時間が無い、お金がない、だからできない」という発言が飛び出した。「当たり前じゃないですか。できませんよ。」今回のディスカッションは、そこからスタートできたのが幸いであった。だからどうする。その話題を参加者自身が真剣に、且つ刺激的に話し合えた事が何よりの収穫だった。

伊藤 達矢

学校教育での「美術」は、「みる」にしても「つくる」にしても、昔から人々が大切にされてきた「考え方」や「価値観」を、作品を介して生徒たちと共有できる教科だと思います。それが地域のミュージアムや大学と連動できれば、その本質はさらに深められるのではないかと感じます。

今回のシンポジウムのテーマであった「連携でつくり出す美術の授業」では、美術館、大学、中学校、企業などから多くの関係者が集まり、それぞれの視点で活発な意見交換が行われました。こうした交わりの場こそが、意義のある教育の姿勢を育ててゆくのだと実感できた会でした。



亀井 愛

シンポジウムでは、参加された方の多くが現場での豊かな経験を持ちながらも、それぞれの環境で苦心されており、学校・美術館・大学・企業という様々な立場から「美術」について「連携」について、活発な意見交換が行われました。全員で、またグループにわかれ、考え、共有し深めることを繰り返した2時間半だったと思います。各地に戻られた参加者の方々が今後更に充実した実践を築き上げていかれますよう、私も取り組んでいきたいと思っています。



熊谷香寿美

本シンポジウムでは、学校・企業・大学・美術館からの参加者が「連携する意義は何か」という問いを各自模索しました。立場を異にする方々と議論するため、意義に立ち戻るだけでなく、連携した美術の授業の実践の先にあること、つまり、子供たちに連携授業を通じてどんな体験をしてもらうのか、さらには成長した子供たちとどんな社会を作るのか、といったことを改めて考えることができました。社会と主体的に関わり、自らの価値を表明し、他者と対話しながら新たな価値を作り出していく。そんな次世代を育成することができるのが、美術の力であるということ認識しつつ、今後も先生方を始め他機関と共に連携実践に取り組みたいと思います。

原瀬 裕孝

社会は常に変化し続けています。社会の変化は、それを構成する自立性と多様性をもった個人の考えや行動の相互作用の結果として現れます。そして、美術は個人の価値観が尊重される重要な役割を担う教科です。美術館、大学、企業がそれぞれの手法で「美術の授業」にアプローチしてきました。次の世代の社会を担う生徒たちに、他者との相違や共通点に気づき、多様性を体得してもらうこと。これは、学校の先生方が常に教育として実践しているものと全く軌を一にするものです。その目指すところは「より良い社会を創ること」に他なりません。今回ご一緒させていただいたことで、自分自身この新たな「気づき」を得ました。

平谷 美華子

様々な経歴の参加者と価値観を共有しながら意見交換をした今回のシンポジウム。その小さな車座の中は熱気に包まれ、大きな力が溢れてくるのを感じました。これも小さな「連携」が生んだダイナミズムだったのではと振り返っています。「連携」により私たちは、自他の価値観の尊重の上に成されるモノ・コトを体験できます。そしてそれらは、時にダイナミズムを生み、授業を一層有意義にする可能性に満ちています。多様な価値観と向き合いながら生きる子どもたちを思うと、「連携」を実践できる美術という教科の重要性はいや益して高まるに違いありません。これからも私自身、様々な連携に挑戦し、いよいよ現場に社会に還元して参りたいと思います。

